

# 関東大震災前後の小説における〈音〉と知覚

——雑誌『新潮』『新小説』『中央公論』『女性』の調査から——

大 國 眞 希 ・ 野 本 聡  
乾 英 治 郎 ・ 安 藤 公 美

## はじめに

本稿は、「〈感覚〉作用，特に〈音〉に注目した環境教育と文学教育の横断的研究と実践」に関する調査，研究の成果の一部をなすものである。文学作品を読むという行為には，如何なる知覚作用が生じるのか。研究の目的の一つは，文学言説が引き起す〈感覚〉作用の機構を明らかにし，〈感性〉という言葉に隠蔽されがちな読者側の〈感覚〉をクローズアップすることで，「読むこと」の内実を明らかにすることにある。言語表出及び受容の変化が生じる最も大きな要素として災害などの環境変化が考えられよう。文学的言説及びそれに感応する知覚の変容を考察する一環として，関東大震災前後の六ヶ月に刊行された雑誌掲載小説のなかの〈音〉に結びつく語句を拾い，震災前後の〈音〉受容の変化を調査，分析した。以下はその報告である。

期間は一九二三（大正一二）年三月から一九二四（大正一三）年三月の震災前後六ヶ月間，雑誌は『新小説』『新潮』『中央公論』『女性』の四誌，創作（小説・戯曲）における〈音〉表象を対象とした。雑誌選定については，震災前からの発行実績が長く創作を重視した文芸誌，震災後現在まで発行が継続する総合誌，震災の影響を大きく受けずにすんだ関西を拠点とした雑誌を優先とし，なるべく震災に特化しないよう注意を払ったが，より広く多様

な雑誌調査が今後望まれることは言を俟たない。音表象について、「自然」「人工・機械」「オノマトペ」「静かさ・無音」「その他」の五項目を設定し、表出の数量を差異化するとともに、数量化では見えてこない物語分析において重要な音の存在の有無を併せて記号で示した。また、本研究における〈音〉とは必ずしも曲名や擬音語など直接的に音を指し示す語のみをいうのではなく、感覚受容を刺戟する文学的な文章の構築や機構から生み出されるものをも指すことも確認しておく。

震災前後六ヶ月の小説の網羅的な読みから、以下共通する問題が抽出できた。第一に、階級、女性（男性、結婚）、都市／地方・旅、世代（父親、学生）などの同時代意識の前景化である。第二に、〈音〉受容のための環境インフラともいえるべき、汽車、飛行機、建設、音曲音楽、蓄音機といった人工音の描写と、極めて表層的な自然音、オノマトペの存在、そして音同様に饒舌な無音・静けさの表出が確認された。第三は、震災後に登場する〈震災小説〉の枠組みの多様性である。体験談、再現の優先、経験の想起、失われたものへの懐古、破壊と再生のダイナミズムなど、同時代の読者の知覚と直接的に結びつく小説が創出されている。震災は、当事者である個人や地域を越えた人類的な体験であり、多様なメディアを通して共有されたその経験は、時空をつなぐ記憶となっていく。データや現状報告、或いは詳細なルポルタージュとは異なる文学の、特に〈音〉に注意した表象分析は、文学と知覚・感覚の関係をより本質的に検討できるだろう。外延的ではない、個々の作品分析による〈生をもたらす作用〉（マルク・マチュー・ミュンシュ）と呼ばれるものの内実の、文学的な回答の可能性の一つとして以下に表と解題を含めて記したい。

## 一、『新潮』——亀裂する〈音〉をめぐる関東大震災前後の文学場

関東大震災前後、『新潮』に掲載された小説群を〈音〉という切り口から辿るとき、微かではあるがそれらは相互に繋がり合いながら、隔てられる自

他の暴力的なまでの差異とそこから生じる社会矛盾という時代相を表象しようとしているのが見えてくる。

三月号、藤森成吉「地主」は「亡びて行くインテリゲンチヤ」としての「貧乏馴れない、気の弱い、善良な若い地主」「小山」には「帝劇のイタリイ歌劇團」の演奏という音を振り分ける。対して紡績工場労働者「木島」がその小指を失ったときに聞いたはずの「機械」の轟音がテキストに響く仕掛けともなっている。残酷なまでに階層によって聴く／聞かなければならない音は分割されているのだ。田中純の戯曲「女と征服者」は「男性／女性」というジェンダーの格差が「征服者／被征服者」の関係に重ねられている。音は「女」を「敗戦のかたとして」連れて来てやがて「刺し殺す」やも知れぬ夫である「村長」が「武将」のもとにいる「女」を奪い返そうとする場面の「どよめきの聲」、村長が「遂に仆る」ときに起こる「歡聲」として表われている。加藤武雄「祭の夜の出来事」は「太鼓の音」が遠くで聞こえる「村の鎮守の祭禮」の夜に起きた「怖ろしい惨劇」をめぐる法廷劇である。

四月号、伊藤靖「庄吉と馬」は、オノマトペとして「チャビチャビ」が出てくる程度だが、「町／村」の区分に職業的屬性が重ねられ、そのどちらからも脱落してしまう「庄吉」の設定は、逆にこの境界が不可侵なものとして意識されていたことを明らかにする。相馬泰三「山犬と兎」は「學士夫人の品子」＝「兎」を「山犬」である「保」が「とうとうその本性をあらはし」襲う場面で「品子」が叫ぶ「絶対絶命の悲鳴」で終わる。男性から女性への暴力であるが、「保」にとっては階層の侵犯という意味があったとも解釈できる。境界が侵犯されるときそこに音が伴う。吉田絃二郎「母を思ふ日」における音表象で注目すべきは「大膽に戦ひの行進曲をうたつてゐる」群集に「一生寢床の上で寝てゐたオブローモフの懷疑」(無音)を対峙しそれを批評しようとする契機が見える点である。

五月号ではまず肉親をめぐる記憶の物語が目立つ。私小説的な作品を評価する磁場が窺われる。正宗白鳥「肉親」は十人の兄弟を回顧する自伝的ともいえる物語である。亡くなった妹、「お七」の幼い頃の「唸泣き」の「ウオー」

がテキストにおいて主人公の重要な記憶と重なる。犬養健「二人兄弟」も「不良性」を持った「兄」への記憶が「烈しく吠え」る「犬」の鳴き声とともに呼び起こされる。この号で最も注目すべきは小川未明「青い糸」である。貧しい「佐吉」がようやく得た仕事の上司である「重役」の「夫人」から依頼され、「青い」毛糸でショールを編むことになった「佐吉」の「妻」。預かった金の半分を「夫のシャツと足袋を買う」うことについて使ってしまう。残りの金でいざ「蜻蛉印」の「青い」毛糸を買おうとしても既に売り切れでどこを探してもない。「佐吉」は「青い糸」を探しに行ったまま帰らない「妻」を案じ、不安の中で「汽笛の音」を聞く。自責の念に囚われた「妻」は死を選び、線路に飛び込み「轢死」していたのだ。「青い糸」は階層差を主題とし、また描かれるその決定的な場面は音によって印象的なものとなる。

六月号、豊島與志雄「神棚」も失業、貧困をテーマとしている。「活動小屋」の「辯士の聲」は当時の音として特徴的なものであろう。既に亡くなっている「義母」が拝み続けていた「神棚」から「五十銭銀貨」が音を立てて落ちてくるところで物語は終わる。小山内薫「帽子の日記」はNew YorkのStetson 會社の黒の中折帽が持ち主の日常を語るという設定である。都市交通機関の発達を窺わせる「ボギー車」が登場するがそこには騒音が伴っていたはずだ。牧野信一「熱海へ」は放蕩な父親と息子との確執を描くが、何気ない形で差し込まれる音として「古い蓄音機」から聴こえる「軍艦マーチ」がある。吉田絃二郎「母を思ふ日」にあった「戦ひの行進曲」とも重なり、同時代の〈音〉として注目すべきであろう。十一谷義三郎「六月の話」は「姦淫の制裁」を風習とする架空の社会を舞台にし、そこに「大理石山」をめぐる労働争議が描かれている。音としては登場人物のAとBの間でまさに交換されてきた女性、「夫人」がBを拒絶する際にあげる「高い叫び聲」がある。徳田秋聲「籠の小鳥」も「工夫たちの賃金値上要求の運動」、「ストライキ」を背景に持つ物語だ。それゆえに音表象としては「機械の響き」、「労働者」たちの「熱狂的な萬歳の聲」を抽出できる。

七月号は「獨身者」とその困窮をテーマに描く作品が集中した。加能作次

郎「二つの遺稿」は作者が預かった独身者たちの遺稿をめぐる感慨を綴る。結核に罹患した者の咳の音、「コホン」は当時の貧困と困窮を象徴する〈音〉だったのかもしれない。宮地嘉六「珍客」は独身者である「三好孝吉」が「岡田嶮岳」という「貧乏繪かき」から結婚を勧められ幾人かの女性を紹介される話である。「下駄の音」が時代性を表している。藤澤清造「一夜」は病気によって貧窮に陥っている男の一人称で語られる。「私」は病気であるがゆえに風の音を「猛獣の吠えるやう」に感じ、「障子をあける音」「牛乳配達の手車」「豆腐屋の喇叭」「鐘の音」にも敏感となる。病に臥せるとき聴覚は研ぎ澄まされる。

八月号の四篇も連載の完結成った佐藤春夫「美人」をはじめ全て「獨身者」をめぐる物語である。瀧井孝作「沼邊通信」は妻が病死し独身となった男が再婚を勧められる話だが〈音〉表象は登場しない。水守龜之助「明け方」は女性独身者が決められた結婚を拒むことをメインとして展開する戯曲である。上演を意識してか〈音〉に関する表現は比較的頻繁に登場するが、注目すべきはストーリーの主調とは別に「狂人の叫ぶ聲」が差し挟まれることだ。「狂気」と〈音〉表象、さらに「女性」を関連づけるコンテクストを考察できるかもしれない。横光利一「マルクスの審判」も被告となる「踏切の番人」は四十一歳で独身である。〈音〉としては「貨物列車の音」である。「貨車の音は普通の客車とは違って奇妙な音」だという。狂気へ誘う〈音〉といえようか。

一〇月号は八月号の同様「獨身者」をテーマにした短編が目立つ。森本巖夫「ひとり」はまさに独り身の男性が友人の結婚を知り、自分も結婚を妄想していく物語。「細君らしい聲のリズム」やカフェの女給たちの「べしやくしや」というおしゃべりなど〈音〉が女性に振り分けられているのが気になる。稻垣足穂「私とその家」は「下級の少年」への想いが挿入されつつ「三角形の西洋館」、green house を「都會の夢」として回想する物語。「蓄音機」が登場するが大きく〈音〉として表象されてはいない。田中純「一夜」は憎からず想い合う幼馴染の男女の「一夜」が、独身時代の思い出として描かれ

ている。二人が待ち合わせる場所が「銀座」、さらに「教会」「クリスマス」などとモダンな舞台設定に特徴がある。「午砲」は当時の音として記憶してよいだろう。「電話」という〈音〉のメディアが描かれ、あまり特異な表現とは言えないがオノマトペは多く使用されている。室生犀星「我がこと人のこと」は子供を亡くした親たちの想いが綴られる。〈音〉表象で注目すべきは「英語」に「小鳥の囀り」を聴き取り、少女たちの喋る様子を「鶴の低い聲」と比喻している点である。

一月号では関東大震災を背景とする短編小説が登場してくる。正宗白鳥「鳶の辰公」である。「人々の叫び聲や、物の壊れる音」と「大地震」の衝撃はまず〈音〉で表象されている。鳶職である「辰次郎」は大震災で壊れた多くの家屋を見て自身の仕事が増えるとはくそ笑むという物語は大震災という事態を少しユーモラスに語っている。岡田三郎「夜明前」はパリを架空の舞台として無産者の女性と有産者の男性との間の恋と背景としての階級差と、戦争で生き残ってしまった兵士の悲劇が描かれている。音としては殺人現場で鳴り響いたはずの「ピストル二發」、あるいは女性が投身自殺を試みる場面での「何か水に落ち込んだ音」といずれも死に結び付いていることに注意すべきか。伊藤靖「發作」は「コカインの製造を擔任してゐる」「技師の鈴木」の「發作」と、それに伴い見てしまう「夢」と、「赤兒」を亡くした「つぎ子」という女性の話。直接〈音〉として表象されていないのだが、「電話」に呼び出されるという箇所は〈音〉とコミュニケーションの変容が描かれていると見るべきか。宇野浩二「私の弟と彼の友人」は「園藝學校」に通う「腦力の鈍い」「弟」の部屋で兄は恋文を見つけ懐にしまうが、実は同じ部屋に下宿する「彼の友人」宛のものであったという話。「ピアノ」「蓄音機」などが話題としては登場するが、直接に音を発していない。なお一二月号は新年特別号に合併されている。

新年特別号には関東大震災後の作家たち自身の身辺記ともいえる作品が目立つ。まず島崎藤村「子に送る手紙」には「震災以前と、震災以後とでは、こんなにも私達の気分が違ふのか」との言葉が見える。震災後の〈音〉とし

ては「ビールの空缶の中で玄米をつく」「あの音」があげられる。また「静かに眠つて居るやうな」「窒息者」など静かさが震災に伴って強調されているようにも思える。里見弴「卑怯」は大杉栄らを虐殺した甘粕大尉の減刑の署名を求められた際の自身の対応が記されている。主人公の想像の中ではあるが、震災後の群衆の声として「ワーツ！」とあるのに着目すべきだろう。牧野信一「スプリングコート」は六月号の「熱海へ」の続編(?)。〈音〉表現は豊富である。「汽船の笛」から始まり、「クラリネットで吹き鳴らす唱歌」、「自働車の音」などがある。「またと無い大地震」後の生活にも触れられている。震災後の背景としても単なる身辺記とは異なるのが佐藤春夫「父の夢」である。「時計」の音、父の「いびき」がテキストに響いている。ただこの作品で注目すべきは「父の夢」のなかに現れた「畸形な女」が震災への恐怖を象徴するものとして描かれている点だ。震災には内容上直接関連しない作品として加宮貴一「展墓」は他人に頼りながら生きる若い男の話。「ぢやりぢやり」というオノマトベ(?)が出てくるが身体感覚的な〈音〉と言えるかどうか。稻垣足穂「香爐の煙」は「アポロ」「デイオニサス」「李白」などを主人公とする足穂得意のコントである。「ハハハ」「カラカラ」笑う、静かさを形容する「シーン」「ガラン」など特に目新しい表現とは言えまい。菊池寛「眞似」は「聖フランチェスコ」の弟子になりたいという「百姓姿」の「ジョバンニ」が「フランチェスコ」の「眞似」をすることで起こるドタバタ劇。豚の鳴き声として「ウキウキ」が〈音〉表現として特徴的か。芥川龍之介「一塊の土」は夫を亡くした女性とその姑との長年の確執を描く。〈音〉としては「牛の屁」。今号で〈音〉表象が最も豊かであったのは横光利一「芋と指環」であろう。まず工賃不払いによって困窮する主人公の息子の名前があらうことか「音」。いわゆるオノマトベが頻出する。「とんとん」「ぴんぴん」「かんかん」「ころころ」「ごくごく」「からから」「ぱちぱち」「ぱたぱた」など。あるいは「もうもうと」も心象の〈音〉として挙げるべきか。

二月号、室生犀星「造り花」は東京(都会)から金沢(田舎)にやってきた幼い姉妹がその格差に気づく様子を描く。都市/田舎の格差を〈音〉の表

象が顕わにしている。例えば姉妹は金沢を流れる河を「音もなく気味悪く」感じる。田舎は「森閑」としていとされ、都市の「あめやの笛の音」「菌入れやの鼓の音」と対照される。金沢を象徴する音として「箔打ち」の描写もある。佐佐木茂索「<sup>マツ</sup>視漸」は雑誌記者の日常が描かれている。「子供の夕刊賣」の声がこの時代の〈音〉として記憶しておいてよからう。「自働車」への恐怖がしばしば語られるが、そこには「警笛」や「衝突」音など可聴としての〈音〉が伴っている。「ピンポン」をする場面が末尾に登場するがここにも〈音〉があったはずだ。諏訪三郎「冬」は貧しい男の何気ない日常を描き、特にドラマも起こらないのだが、音の描写は比較的豊富である。「不景気」によって増えた「物賣りの聲」、 「彼」の夢とうつつの間に聴こえる「汽笛」「ポンプ」「目覺し時計」「荷車」などは「ゴトゴト」「ギシン、ギシン」「カタコト」「カタカタ」とオノマトペが付随している。「電話の交換手」、 「鐵道自殺」も「彼」と「細君」の会話の中に出てくるが、ここには可聴性としての〈音〉を聴くべきだろう。前田河廣一郎「犬」は、アメリカ政府に「あやまつて」「兵隊に徴集された」「大井鐵太郎」が「戦場から、二年ぶりで戻つて來た」ところから物語が始まる。音描写は必然的に銃器の発する〈音〉をめぐるものが頻出する。「犬は、轟音とした砲音の下に、悲鳴をあげて、仆れた」などという一行はその顕著な例だ。帰還兵のPTSDを描いた作品として注目すべきだろう。

三月号、藤森成吉「お園の手紙」の「第十三」の手紙は「九月十日」の日付を持ち、震災への見舞がその内容となっているが、注目すべき〈音〉表象はない。岡田三郎「一九二〇年代（一幕）」は現代ローマを舞台とした戯曲である。時代を表す〈音〉として「ファシスタの示威行列が吹奏する喇叭の合奏」が登場する。戸川貞雄「遠雷」は夫の「妾」に会いに行く「妻」の話である。自然の音としてタイトルにもなっている「雷の音」が出てくる。中河與一「木枯の日」は講義「愛の心理」を受講する二人の大学生が自身の「遺傳上の恐怖」について語りつつ互いを追いつめていこうとする対話劇である。不気味さを表す「梟」の「鳴き聲」が〈音〉として差し込まれている。久米



正雄「撮影」は手に入れた「活動写真機」で大震災の惨状を記録しようとする身辺雑記的内容であるが、震災とメディア、何を記録し、それによって何がこぼれ落ちてしまうのか、記録と記憶が事後的に創作されてしまうことについても思考しようとしている点で注目してよい作品である。震災の被害を表象するような〈音〉は登場していないのだが。(野本 聡)

## 二、『新小説』——震災を契機とする〈大衆小説〉への傾斜と〈音〉の貧困

雑誌『新小説』は関東大震災の影響により、一九二三年九月号から一二月号にかけて休刊となり、翌年の一月号から編集顧問に芥川龍之介・菊池寛を迎えて刊行再開を果たしている。休刊を境にして、同誌の編集方針には若干の変化がみられる。巻頭に志賀直哉・近松秋江・室生犀星・泉鏡花・佐藤春夫といった〈純文学〉系の有名作家の手になる小説・戯曲を配置し、挟み込みの別紙にやや通俗的な読物や、婦人欄・生活文化欄を置くのが基本的な誌面構成であるが、震災後は別紙に占める小説の割合が増える。具体的には、長谷川伸・白井喬二・直木三十三(=三十五)・佐々木味津三といった所謂〈大衆小説〉系の作家達による新講談系読物(時代小説)や、平山蘆江・沢田撫松・畑耕一・岡本綺堂らによる怪談系読物などである。一九二四年といえ、菊池寛が小説と講談を折衷した「読物文芸」を提唱した時期でもあり、同年一月号から連載を開始した本山荻舟「宮本武蔵」を始めとする新講談・史談の幾つかは、春陽堂が同年に立ち上げた『読物文芸叢書』から単行本化されている。新講談系読物の導入に関しては、菊池寛の意向とみてよい。一方、怪談系読物の増加には、妖怪趣味の強かった芥川龍之介の関与が疑われる(一九二四年四月号から五月号に亘って掲載された「怪談会」は、芥川家の近所にあった田端自笑軒が会場になっている)。

震災後の『新小説』は、〈純文学〉を尊重する震災前の姿勢を保持しつつも、〈大衆文学〉路線に舵を切っていたと言い得る。こうした誌面の変化との関わりで興味深いのは、震災前に掲載された佐藤春夫「序曲」(一九二三・

三月号)である。主人公の男は、自分の乗っている市電が「不断にメリ、メリ言つてゐる」のに気づき、やがて窓ガラスが「バリバリと折れて」走行中の電車が解体するのではないかという恐怖に襲われて下車する。立ち寄った古本屋で洋装の美女に出会うが、彼女が「荒木又右エ門」の本を手を持っていることに幻滅する。二週間後、男は彼女と一緒に市街戦の中を逃亡するという妄想を見ながら卒倒する。——本作において新講談系の読者が幻滅の対象として描かれているのは、それを低く見る価値観を、佐藤と震災前の『新小説』の読者層とが共有していた可能性を示唆する。それにしても、ナンセンス小説風ではありながら、関東大震災の予兆とも思えてくる不思議な作品である。

〈音〉描写が比較的多いのは、丹野てい子「蓄音機」(一九二三・六月号)である。「私」(女性)が間借りしている家の家主(女性)は、かつて夫と幼い娘を捨てて出奔した過去があり、夜になるとうなされて異様な声をあげる。ある日、どこかから古くなった蓄音機を貰って来て、それをかけると「があがあ」と「調子外れ」の音がして、しばらく「ぐうぐう、ぐうぐう」という不明瞭な音が聞こえていたが、やがて「からから」という音がして壊れてしまう。家主はそれを修理してレコードをかけるが、どこか不安定な音である。その頃、隣家には病人があり、回復を祈る家族のお経や数珠を「ざらざら」回す音が連日聞こえる。そして隣家の葬式の日にも、家主は蓄音機から調子外れな音をさせていた——因業な中年女性の生態を批判的に見つめる「私」の冷眼が印象深い。作中には、家主の掃除や井戸の水汲み、調理などの生活音や、近所の女子大から聞こえる鐘の音や讚美歌など、数々の音が描きこまれている。ただし、蓄音機が奏でていたレコードの題名や曲調に関する具体的な記述がないのは残念である。ちなみに、翌月号に掲載された水上瀧太郎「邂逅」(同七月号)には、喫茶店に置かれた蓄音機から義太夫・かっぽれ・カチューシャの唄・鴨緑江節・行進曲などが次々と聞こえてくる、という場面がある。

ここからは関東大震災後の掲載作品に言及していくが、その前に二つのこ

とを指摘しておく。一つは、一九二四年一月号から三月号の時点で震災に言及した小説は極めて少ないということである。平山蘆江「生き残つた男」(一九二四・二月号)の中で震災の犠牲になった女中の話題が出て来るのと、田山花袋「焼跡」(同三月号)で被災地の状況が描写されているのに留まる。執筆陣が震災に対して無関心だったというよりも、それを語るには時期尚早という共通認識があったのかもしれない。ただし、小島政二郎「子にかへる頃」(同一月号)・加宮貫一「悪日」(同二月号)は、震災後の金融不安を背景にしている。いずれも、語り手=息子が父親から金の相談を受ける場面があるが、同時掲載の佐佐木茂索「選挙立会人」(一月号)や長与善郎「冬の旅」(二月号)も、息子と老いた父親の交流を主題にしている。明治一代男の時代が関東大震災によって終焉を迎え、主導権は息子世代に移ったという寓意を読み取るべきであろうか。もう一つは、新講談系読物の〈音〉描写の予想外の貧しさである。「宮本武蔵」(前出)のように剣劇的な要素を含む作品は、効果音としてのオノマトベなどが多用されているのではないかという予測が成立し得るが、実際にはスタスタ歩く・ギラリと光るといった、擬声語というよりは擬態語(視覚的なイメージ)が主であった。また主人公の言動や心情描写に筆が割かれる反面、彼を取り巻く周囲の風景や〈音〉が描写されることは意外に少ない。長谷川伸「夜もすがら検校」(一九二四・二月号)のように、検校の琵琶の演奏と謡が作中で重要な役割を果たす作品にしても、〈音〉の具体的な描写には乏しい。〈大衆小説〉は視覚的要素が勝る文学であるという印象を受けた。

室生犀星「家庭」(同一月号)と尾崎士郎「痴情」(二月号)は、いずれも〈足音〉が重要な役割を果たしている。「家庭」の主要人物は、勤め人である家の主人を待つ妻と女中である。二人は家の主人の靴音によって帰宅を察知するのを常としていたが、妻は「夫の靴音が分からなかつたばかりか、よく聞き違へる」のに対して、女中は「旦那様の靴音はすぐ判る」と豪語していた。妻は女中に「お前の耳はいゝね」と思わず口にする。一方、夫が女中の名を呼ぶ度に妻は「注意深く耳がはたら」き、夫の「音声」が「耳底に残

る」のだった。——あるサラリーマン家庭の中にある一種の三角関係を物静かな筆致で描いた短編で、「靴音」と「音声」が重要な意味を担っている。「痴情」の主人公は、家を出た女が別の男と会っているのではないかと邪推し、彼女の帰りを耳をそばだてて待つうちに、音に対して過敏になる。自動車・飛行機の「唸り」、「薪を割るような音がゆるやかな音階をつくつて聞こえて」、「裏木戸を開けるやうな音」「落ち葉を踏みつけるやうな音」に驚き、「下駄の音」に聞き耳を立てる。音がしない間は「此の静かな空間を横行してゆく不可思議な魔物」の存在を感じ「時計の音だけが耳にへばりついた」。子供の声、人力車の音…「すべての音がみんな彼の中へ集まって来た。頭の中が急に広い虚ろになってしまったやうな気がした。すぐにも、光枝の足音が門口へ近かづいてくるやうな予感がした。と、微かに、そして、はつきりと彼は坂を下りてくる草履の音を聞いた」。そして、実際に女（光枝）が帰ってくるところで小説は終わる。前号掲載の「家庭」と同様、足音を頼りに家人の帰りを待つ人間の心理が描かれている。当時は今と足音の響き方も違っていたのであろうか。〈コミュニケーションツールとしての足音〉に注目した同時代研究の必要性を考えさせられる。

「家庭」「情痴」が〈都市〉の音を描いているのに対し、金子洋文「狼」（三月号）は〈地方／自然〉の〈音〉が描かれる。舞台は秋田県。嵐の夜、海のそばにある旅館で一夜を過ごす男女の愛憎関係を描く。冒頭、念仏を唱える老人の「看経の鐘」が「かんかん」と鳴る場面から始まる。そして、荒れ狂う波の音が、「濁流の声」「激しい騒音」「地の底でうなつてゐる波の音」「海は声ばかり」「ど、ど、どーっと獣の吠えるやうな物凄い海の声」など、様々に表現される。海鳴りは当初から「声」にたとえられることが多かったが、獣の声という連想から、語り手「私」が幼少時に父親から聞かされた、北海道の「吹雪の音」や、その中から聞こえてくる「狼の吠える声」に結びついていく。そして遂に、「私」は海上を渡る狼を幻視する。やがて朝が来て、暴風雨は去り、「私」は「楽しい波の声」を聞きながら、「新しき希望」を抱いて歩み始める。〈音〉が生み出す幻視を描いた短編小説といえるだろう。

「狼」もそうであるが、地方（田舎）が舞台になると、現代小説・時代小説を問わず、鳥や虫の声といった自然の〈音〉の描写が増える傾向があった。逆に言えば、東京＝都会の〈音〉を捉えた作品が少ないということで、『新小説』から関東大震災前後の東京の〈音〉の変化を浮かび上がらせることは難しかった、というのが正直な感想である。（乾英治郎）

### 三、『中央公論』——共時性の創出と創造的読みを誘発する〈音〉

広汎な執筆陣を揃える『中央公論』は、階級やジェンダー、結婚や独身者、都市と田舎などがテーマとなることは『新潮』と共通するが、小説の〈音〉は多様な偏差のなかに開かれている。

記憶や回想のなかで人物や出来事を象徴する音として、藤村千代（後の宇野千代だが、初出時の姓を以下も優先する）「追憶の父」（一九二三・三月）の煙管の音が挙げられる。両親、特に父への思い出を、百合という一人の女性の視点から描いたこの小説のなか、若い母と自分を恐怖に陥れる権威的、暴力的な父親を象徴するのが彼の鳴らす煙管の音であった。宇野浩二「四人ぐらし」（四月）では、家族四人で囲む食卓風景が、幼い頃の記憶にある蠶が葉を食う一室の音と重ねられている。宇野は「悲しきチャアリイ」（一九二四・一月）でも象徴の音を描く。ある映画でチャップリンを演じた茶屋半三に関しての記憶を語る一場面に、四五年前の有楽座の舞台での「カッタカッタと靴で舞台の板を踏むところの——それは我我往來の歌舞伎芝居に馴れてゐた青年にとって、恰も泰西近代劇の象徴のやうに、胸に一種のときめきを起させるところの、——懐かしい音」を挿入する。ナポリで自殺したらしい茶屋の寂しさを、シュニツェル『恋愛三昧』の終幕で、「見えないテオドルがドツペルアドラアの旋律を口笛で吹いて行く音」に合わせて「ヂリヂリと鈴が鳴って幕で下りる」その寂しさとも重ねる。このような象徴の音は、藤村千代の「或る女の生活」（一九二四・三月）では、より複雑に表出される。主人公であるお紺が過去に引き戻される時、必ず音がその契機となる。「ふ

いに田舎の家の竹藪がざわざわ 鳴つて居る音を聴いたやうな気がした。竹藪の蔭の茗荷の白い花が瞭然眼に見えた」,あるいは「七番さん,七番さん——」それは、お紺の卓子番号であつたが、さう呼んで居る男どもの声が、ふと、彼女の耳に聴えたやうな気がした。青いのや、赤いのや、さまざまな液体の盛つてある洋盃を高く差し挙げた、数知れない手が、お紺の方へ差し出されて居る有様を、彼女は目のあたり見たやうな気がした」など、視覚の再現が聴覚から起こされる。あたかも、「かたん」と音がして、それは、彼女が子供の頃に見た覗き眼鏡の変り目のやうに、音がして、絵が下りた」という幻燈現象のようでもある。〈音〉としての記憶と同時に〈音〉により再現される情景をいずれも表すが、震災後の二作がより複雑な象徴機構をもっている点は注意される。

音曲や楽曲を表す音は、室生犀星「馬守眞」（一九二三・三月）の静かさのなかに際立つ胡笛の音や、正宗白鳥「平凡人」（夏季増刊号）の主人公の妻が奏でる琴の音「コロリンシャン」、近松秋江「頽廢時代を顧みて」（一二月）の清元「傀儡師」などである。宮地嘉六「二人の独身者を繞る縁談」（一〇月）は、階級的に「中の下」をよしとする知識人を主人公に、男性側からの〈結婚〉をモチーフにした小説（因みに彼らの理想は、従順、きれい、貞淑、そして貧乏に対して忍耐強い「マリアのやうな女」である）だが、安来節・大津絵節・宗十郎・軍歌・三味線・琴などが生活の音風景として描出されている。秀逸は、金子洋文「投棄てられた指輪」（六月）である。秋田を舞台に、保守的な母と住む主人公が、先進的な愛人と別れるまでのこの戯曲は、屋外に流れるロシア飢饉救済のための西洋音楽(管弦楽)「チャイコフスキーの1812年」を幕開けに、姪が歌う「虹が出た、虹が出た、空を一面の海と見て」（唱歌「虹」）を挟んで、最終的に二人の記念の指輪を部屋の下に流れる堀の泥川の中に投げ棄てる音、「ターン、ターンと、軽い水音が夜の静かな空気の中にひびく」で閉じられる。ト書きに「無言」二一回、「沈黙」二〇回あり、古い結婚観への言葉にならない異議を伝える饒舌な無音記号となっている。また、長与善郎「或る社会主義者」（一九二四・一月）は、震災体験とピア

ノを描き、特筆される。ある労働者が震災経験を経て社会主義者を自称しなくなるまでのこの話の前後半を分けるのが、ピアノの聴こえ方であった。間借りしている家の前の土地が富豪に買われ、そこから聞えるピアノに合わせた「「ばかばかしい」笑い声」「「のんき」な明るい幸福さ」を軽蔑していた彼も、「異様な大音響」と共に始まった地震経験以後、ピアノの音に「音楽その物の効果だけ」ではなく「音楽と一緒に連想されるあの家の幸福さ」を感じるに至る。

小川未明の「村の教師」(五月)には「小川の中から高く水音が響き、「若葉が喜んで笑つたり踊つたり」、「水田に蛙のうた」が聞えるなど自然の音が、「土地繁栄」(一〇月)には、汽車、車、流行歌に代表される都会的な音風景に対する「小鳥の啼く声と蟬の鳴く声との他は何もなかつた山々」といった村の音がある。同じ自然の音を描いて対照的なのは、新井紀一の二作、軍隊での療養期間を描く「雨の八号室」(一九二三・三月)と、暴風のなかに狂っていく神経を描く「悪日」(夏季増刊)である。前者は軍隊を舞台とし、チブスを病んだ主人公が回復するまでの話の中に、かつて一人の兵卒が虐待死し天井に放置され、やがて死体の濡れ跡が天井に現れた話が含まれる。その滴りが雨音と重ねられ、強烈な印象を残す。後者「悪日」は、主人公の狂気とシンクロする風が「がりがりあたまの中を搔き穿てる。まるでざらざらした毛むくちやらかな手で、むちやくちやに心臓を撫で廻されるやうな気味の悪い、不快な気持」として描かれ、外界の音は、風の呻り、ぼこんぼこん鳴る屋根看板、ばたばたはためく幟や小旗、さらに、砂礫をがりがり噛んでいる馬子が、馬をびしーりびしーりと叩く音など、「何も彼もが泣き出したくなるやうな不快な騒音」として彼を襲う。むしろ電車の響きが「風の呻りを消し、それから起る心の不安を一掃」する音として知覚されるが、電車を降りるや、音の「記憶が現実の姿を取つて頭の中に表現され」てしまう。

佐藤春夫「佗しすぎる」(四月)には、「カタカタカタいふ急ぎ足の駒下駄の音」がやがて姿を見せる女性への期待として書かれる。「二階の賑やかさにくらべて清吉は、自分の身のまはりには何だか足もとでこほろぎが鳴き出

すやうな気がして」とは、疎外感を音に託すイメージだが、現実には聴こえない心象の音を描出して特徴的だ。外部の音として発せられることのない心の〈聲〉は、豊島与志雄「変な男」(七月)というストーカー小説の中では、ヴェルレーヌの詩「都会のよに雨降るごとく、吾が心のうちも嘆く」(「言葉なき恋歌」)の引用として登場する。また、志賀直哉「雨蛙」(一九二四・一月)では、「ガタンと音のするやうな感じ」としか表せない主人公の心情が描写される。

テキスト構造を支える音の一つが反復である。「或社会主義者」のピアノの音同様に、佐藤春夫「一夜の宿」(六月)では川のせせらぎが繰り返されその機能を行う。一方、ただ一つの音が重要なテキストもある。同じ佐藤春夫の「魔鳥」(一〇月)は、表層にはほとんど〈音〉はしないが、一度だけ啼くシイレク鳥の啼き方が物語の語り方と類比的に把握される。藤村千代「淡墨色の憂鬱」(十一月)では、洋傘が開くときの音が語りの核となる。金に困った主人公が、懇意にしているロシア人留学生宅で十円を借りる場面で、同居女性が買ったばかりの洋傘を見せる。そのとき「キ、キ」という音と共に「薄ピンク色の洋傘がぱつと開かれ」刺繍された百合の花が咲く。タイトルである薄墨色の憂鬱とは、借金を返さない心情に由来するが、それがこの洋傘の薄ピンク色と対照され、響き合う構図である。同じように、徳田秋声「ファイヤガン」(同月)では、液体の音が前後半で意味を変える。震災時の人間たちの言動について「賑やかに興じ合つて」いる刑事達が、「ビール瓶より一回り太い筒型のつやつやした黝黒色」の物体を見せられ、爆弾(ファイヤガン)だと説明される。「不逞の鮮人」が秘密に買ったものであろうと推測する理学士の説に反し、実は「最新式の消火器」であった。「だぶだぶしてゐるのは猛烈な爆発性をもつた薬品ですからね」という理学士の言葉は、勝手な推測と合わせて「苦笑」の対象となり、音は意味を反転させ批判性をもつ。このような音の反転性は、芥川龍之介「あばばば」(一二月)に顕著である。ローマ字表記、聞き間違い、電話交換手とのやりとり、公的な英語講演会と私的な会話などを含みつつ、最後に繰り返される〈あばばば〉



という赤ん坊をあやす音／聲により、それまで描いてきた女性のイメージを一転させる物語構成は巧みである。タイトルに擬声語<sup>オノマトペ</sup>を用いている点も特筆されよう。

宮地嘉六「第一号監房にて」(一二月)は、第一号監房に入れられた人々を活写した小説として多聲性に富む。三畳ほどの一室に、地震を機に男に捨てられ途方に暮れている女、不良自警団や暴利商人、社会主義者の一味、地震のために発狂した在郷軍人、浴衣を着た「気がちひ」の真似をした男、品のある老人、貸家の差配、北海道生まれの労働者、日本の民主主義者の市川某、そして三好孝吉が詰め込まれている。「街の大混乱を思はせる多忙な兵士や警官や貨物その他を運搬する自働車の轟が留置場へも聞へた」とあり、これが留置所外部を象徴するのであれば、内部の「轟」を収めた小説といえる。「天意は如何なる場合でも巧みに公平である」という結末も象徴的である。

最後に、オノマトペの多さと本研究が問題とする〈音〉は必ずしも関係しないことを挙げたい。長谷川如是閑「踏んだり蹴たり」(四月)、野上弥生子「澄子」(同月)、徳田秋声「お品とお島の立場」(五月)、正宗白鳥「残された夫」(七月)など、オノマトペが頻出するが、テキスト構造や読者の知覚に関わる〈音〉ではない。一方、稲垣足穂「星を売る店 A merry tale」(七月)は、オノマトペが七〇箇所、他作品ではほとんど見られないローマ字表記が六箇所認められる点で特異である。神戸を舞台に「いろいろな国の色彩と音が騒然とからまつた貿易港のたそがれ気分を焙り出してゐる」様を描く。「ピアノのワルツ」「トリアドルソングの口笛」「スペインの何とかいふ曲(手風琴)」「廿世紀の悲しみを表はした、みちかい舞踏曲」ほかに、コダツクのシャッター音、ハモニカ、マンドリン、蓄音機の店、ハワイヤングター、「へんてこなメロデー」「何とも云へぬ奇妙なメロデー」など音の多用により「口では云はれないファンタジー」を「うすい鶺鴒のやうなもの」として描く感覚が震災前に登場していたことを記しておく。(安藤公美)

#### 四、『女性』——震災を逃れた「文化的」雑誌における「文化」回復の目論見

一九二三年三月号掲載の「小さき犠牲者」は、一幕物の戯曲であり、「京一」という「盲いた八歳の子供」と設定される少年が出てくる。そして、溪流の崖の上から「下の方でほんたうに面白い聲が始終してゐるぢやないか」「大ぜいの人が笑ふ聲がする」と言う。他の人物によって「あれは水の音ですの」「水が岩に打突る音でムますの」と言われ、「そうかなあ、水の音かなあ」と一応納得はするものの、「あんなに歌つたり笑つたり呼んだりする水はどんなだらう？」と疑問を持ち、題名が示唆するように、彼は溪流で溺死してしまう。その悲劇を効果的に表すために、「(間) 溪流の音がやゝ高まる」などとト書きが差し込まれている。戯曲の性質にあった、筋運びに関連する〈音〉に分類されるようにも思われるが、特徴的な使用だ。

四月号掲載の「紫式部の戀」。健啖が過ぎる宣孝が身罷った直後に、亡骸の枕元に「白い瓶子」が置かれているのに気づいた式部が「これぞ良人の生命取りよ」と「齒がみをして」取り上げる。その時、「トプントプンと音がして、内部に人を酔はせる水が、半分からも残つてゐた」。その「トプントプン」という音が、式部が宣孝の「丁度お腹の眞うしろを強く親指で押した時に聞こ江たのと、同じやうな音であつた」と書かれる。こうして、「瓶子の中に鳴る音」と「良人の食囊の鳴つた音」を重ねて「言ひ知れぬ妙な氣分に」なるのだが、本作は宣孝の亡き後、道長に対しても〈戸を閉ざし〉たまま（この箇所では、「毎夜毎夜、くひなのやうに、式部の息んでゐる渡殿の戸をたゝいたが」と比喩表現が使用されている）、「式部は自分の心の中にある亡き良人の魂魄を慕ふ快感に生きて、一生を終つた」という明確な中心線を持つ。「自分の靈性の中に亡き良人宣孝の魂魄を見出す」とも書かれ、この「魂魄」の表象を考える上でも「トプントプンの音」は聞き逃せないだろう。「追憶」では結末で「いつそ僧堂へでも這入つちまはうか知ら」と考える中心人物が「木魚を叩いて読経するたびに、彼の田舎の種々のことを思ひ出した」という一文がある。当該作は題名の示す通り彼の「追憶」なので、

示唆深い〈音〉と考え得る。「**藝者の母**」の結末は「千代葉の下駄の音がいつまでも聞江た」で終わっており、芸者の母をもつ千代葉の心理や存在を示唆する〈音〉とも考えられるだろう。「**堤**」は、戯曲の特性を生かすために、「幽かに幽かに三味線の音」を効果的に使用し、結末でも「三味線の音はだんだんだんに遠くなつて行く」という余韻でもって終幕を迎えている。

**七月号掲載の「悪路**」はなかなか通じあわない男女が路を歩く筋立てで、〈音〉は殆どないのだが、「下駄の音は、そればかりでも一種の音楽を調べてゐた。二人は、それを無心に耳に聞きながら歩いてゐた」という印象的な表現がある。**八月号掲載の「貞操」と「海彦山彦**。「貞操」では夫が「あはゝゝゝ」と快活に笑う姿が繰り返され、描かれ、「海彦山彦」では「無言」が多く繰り返されている。(次の九月号の編輯後記によれば、大阪中之島公会堂で愛読者招待の文芸大講演会が開催され、「海彦山彦」が「不意の思ひつきで」市川猿之助と里見淳によって朗読されたとのこと。) **九月号(発行は八月七日)掲載の「母と娘**」。互いに思い遣りながらもすれ違う母と娘の様子が、兄の視点から語られる小説。娘から離すために、母は兄に連れられて汽車に乗せられるのだが、その待ち合わせの停車場では「沁みつくやうな聲でこほろぎが鳴いてゐた」。そして、「ざはざはと濤のやうに鳴る一面の桑畑の彼方」から「箴の音」が「とんから—とんから—とんから—」響いてくる。その前夜、娘は箴を鳴らしており、その音に彼女のかなしみを聴く。そして、その音は「あひかはらず、とんから、とんからときこ江て来た」と括られる。

**一〇月号**は「関東大震災写真廿数葉」が掲げられ、「文壇名家遭難記」「震災論叢」の特集、「女性本号及次号売上金の内より」罹災地に「金壹萬圓の學用品を寄贈」する旨の社告や震災直後の懸賞小説の募集も公示している。そこには失われた文化の回復の手段として、「大災に洗禮せられた新しい藝術を廣く江湖に求めたい」とある。小説で特筆すべきと思われる作品は「**お時宜**」であろう。汽車の中で「いつか読んだ横文字の小説に平地を奔る汽車の音を「トラタタ、トラタタ、トラタタ」と寫し、鉄橋を渡る汽車の音を「トラララツハ、トラララツハ」と寫していた」ことを想起し、結末でもこの語

句が繰り返されていて、筋に深みを与える〈音〉である。「電車停留場」の最後の場面は登場人物の一人の「口笛の音は、曲がりくねつた横町の近道をぬけて、淋しい神社の境内の方へ遠ざかつていつた」と結ばれる。一一月号では「生別死別の記」「帝都復興に対する民衆の要求」「震災所感」などが特集されている。「鸚鵡」はある画家の描いた陰気な鸚鵡の姿のせいで、自分が飼っている鸚鵡にも暗い姿を一瞬見てしまうが、翌朝明るい姿に戻っているというもの。それらの鸚鵡の姿は「く、く、く、く」や「くー。くー」という聲によって示される。登場人物の心理や状況を重層的に示すために、その聲は大きく役立っている。「老婆の唄」では、画家である主人をわずらわせないために「老婆」が外で用を足す、その音が描かれ、結末で主人の留守中に聞こえてくる老婆の唄「ホイ、ホイ、ホイホイ…」が示される。視点人物「私」は隣室からそれら以外にも種々の〈音〉を聴く。創作欄以外では大谷句蟬の「秋蟬」が特筆される。「蟬」を題名に掲げ、震災の模様、その後を述懐する点が注意をひく。「母」にあるのは、基本的には時空を表現する（舞台装置としての）音であるが、「子供達の可愛らしい聲が響き渡って行く」のを「へんに聴衆の耳に悲しく聞こえた」とされるのに留意したい。

一九二四年一月号掲載の「小春の狐」は幻想的な小説だが、冒頭に「あの鐵鎚の音を聞け」と船大工の「カーンカーンと打つ槌」があり、「船大工が謡を唄ふ——一寸余所にはない氣色だ……剩へ、地震の都から、どぼんとして落ちて来たもの、目には、まるで別なる乾坤である」と地震に触れる描写があり、幻想的な舞台を引き立てる〈音〉が散在する。「十日の菊」もまた、「震災後家を擧げて阪地に去られた小山内君」が「わたしの家を訪はれた」と震災のことが小説化されている。そして震災前の東京が回想されるのだが、そこでは「東京での言葉」「田舎訛り」が話題となっていたり、「古曲のみ喜び聴いているわたし」が「時代の新俚謡に耳をかさん事を企てた」ことなどが描かれたり、「新しい女の生活」が「苦学生の弹奏して錢を乞ふヴァイオリンの唱歌を聴くに等しきものであつた」と考えたりと、地震以前の風俗が〈音〉と共に活写されている。創作欄ではないが、吉田絃二郎「落葉を聴け」

という感想にも触れておきたい。そこでは地震について書かれ、「私たちは森を歩む時、言葉を忘れなければならぬ。有線の実在の世界は言葉を絶した境にのみ存在する」と書かれている。「贅沢」では中心人物が想像する「極楽」や「天国」の情景が「天人の唱歌」「迦陵嚩迦の声」と思い描かれ、地上は、「雀が囀つてゐる。車や馬の通る音がしてゐる」と対比される。「眞書の出来事」は、子どもが行方不明になる出来事が、その母の午睡で見る悪夢と父の回想と共に展開する。子どもの存在は冒頭から「下駄の音」「砂利の音」「煩わしい響き」として示される。また、子どもの持つ籠で鳴く「蟬の聲」も登場するし、子ども自身、「可愛らしい聲」の持ち主でもある。また父の恋人のような存在との逢瀬と、母が子どもを捜す現在とを重ねるものとして「石と石との間を白く流れる単調な水音」がある。舞台装置以上の〈音〉が聴きとれると言えるだろう。「道灌の缺血」は「学校用歌劇」。歌の部分は文字サイズを拡大して表記している。

二月号掲載の「喬生と金蓮」。「この物語の最初に私はふとアラ・ナヂモヴアの紅燈籠の夜の光景を想起した」で始まる当該作は、「支那がいまほ古い姿のまゝ」に残っている設定で、かつ、亡妻が姿を現す物語で、「支那音楽」特に「胡弓」の音が繰り返し響き、「笙竹の音」も表象する。亡くなった妻が美しい姿となって現れるという筋に添えられる、示唆深い〈音〉だ。一九二四年三月号掲載の「窮鳥」には〈音〉表象も殆ど皆無。ただ田山花袋の「蒲団」を想起させる筋で、細君が、女弟子に出した林檎に果物叉を刺して「サクリと歯音を立てた」とあるのが印象的。「林檎」は汽車の中で「子供を可愛がるから東京に居てはいけない」と言われたと話す男に同乗する「私」の話。その男の回想語りの中の子どもたちが立てる音、それを聞く電車に響く音、更には語りの現在そこに存在する男の不気味さを支える音など多くの〈音〉が小説空間を支えている。

もちろん、作家の資質もある。震災以前から〈音〉が散見し、巧妙に機能する小説もあり、震災以後に過去の風景やその周囲の人々を震災後の情況を示しながら描いていても〈音〉が見られない作品もある。しかし全体的な傾

向として、〈音〉表象が誰か人物の心理を表現したり、ある状況を象徴したり示唆したりするだけのものではなく、白昼の悪夢や亡妻が美しくなって帰ってくる、あるいは現在の汽車に響き、その中にある不気味な男の存在と彼の過去の行いなどが交錯的に示されるなどというような、日常とそこに重なるように現出する非日常を描く内容が増えたこととも関わり、その多重性を支える〈音〉表象が増加する兆しがあるよう思われる。(大國眞希)

## おわりに

「私にあつては、刹那の刺戟——たとへば、外部の色彩や、音響や、煩わしき——といふものから離れては、全的に人生について、もしくは、人間の生活について考へること」はできないという一節（小川未明「風に揉れる若木」）や、「私たちは森を歩む時、言葉を忘れなければならぬ。有線の実在の世界は言葉を絶した境にのみ存在する」（吉田絃二郎「落葉を聴け」）というメッセージに対し、私たちはどのように反応できるのか。

本研究の成果として、当該時期の〈音〉のアーカイヴを析出できた点がある。「午砲」「下駄」「三味線」「煙管」「汽車」「電話」「蓄音機」「自動車」「機械」「唱歌」「楽器」「こほろぎ」「蟬」「川・水の音」など当時の現実世界に聴こえていた音がある。それらは、予想以上に棲み分けが明解でもあった。階級、世代の新／旧、男／女、都市／地方など、それらの属性を象徴する〈音〉として、境界侵犯が行われることは極めて少ない。したがって、アーカイヴの析出は、その範疇に収まらない、例えば豚の鳴き声、牛の屁、お腹の音など、耳慣れない音への知覚の注意を向けることを積極的に促すともいえる。

一方、聞き慣れた〈音〉は、その聴こえ方を以て異化されてくる。「足音」は、不在から現前に向かう直前に響く音として機能性の高い音だが、視覚イメージが常に聴覚に遅れて到来する点で重要であろう。また、共時性の高い「電話」「蓄音機」は、明瞭な伝達を疎外されて登場することが多い。不明瞭さこそ、これらの引用が意味をもつのである。「汽車」「海鳴り」「風」「雨」

は、主人公たちを脅かし、日常世界を超え出でて、時に狂気へ誘う〈音〉として聴こえる。「狂気」「狂人」も同時代モチーフとして頻出するが、女性には「叫び聲」が割り当てられ狂気を発信するのに対し、男性には神経を狂わす外部の音が割り当てられ狂気を受信する。読みの圏内において〈音〉は、イメージという視覚作用に有効に機能しながら、様々に遍在している。

しかし、テキストを読むにあたりより重要なのは、現実には聴こえない〈音〉が感知される点ではないか。解題の中に示された、隠喩としての「かたん」や物語の「中心線」として見出される〈音〉、夢と現の間に表出される〈音〉など、テキストを前にした読者に確かに響く〈音〉がある。たった一音が風景を複層化することも可能なのである。単なる聴覚刺戟とは異なるこのような〈音〉表象は、震災前よりも以後に確実に増えている。少なくともその変容の予兆を確認することはできた。もちろん、作家の資質が関係することも否めない。佐藤春夫、室生犀星、豊島與志雄、芥川龍之介、藤村(宇野)千代、金子洋文、宮地嘉六、横光利一、新井紀一などは、この時代に限れば〈音〉を巧みに使用する作家として名が挙がる。逆に、新講談系作家たちの〈音〉の貧困さや震災をモチーフにしながら〈音〉と無縁な谷崎潤一郎や菊池寛の戯曲もあった。

読書行為における〈音〉の重要性とは、テキストに落ちている音をただ拾うことではない。物語の森を歩き、私たちは音を聞きとめるのではない。〈音〉を聴くことを通して如何に森を形成できるのか、テキストに〈音〉を聴くとは、そのような創造性を意味する。〈音〉の再現性とは、イメージ通りの世界を再現することではなく、不在の世界をありありと可視化させることである。〈音〉は、表象の不可能性に果敢に挑戦する契機として、〈生をもたらず作用〉を読み手に施す。そのような〈音〉の発見に、震災体験が寄与したことは疑いえない。「大砲のような音の刺戟が、彼に爆弾を仕掛ける夢を見せたりもする」(「或社会主義者」とは震災ショックの一表現だが、大きな音としての震災表象はいずれの雑誌にも見られた。本来震災小説として描かれたわけではないいくつかの小説が、あたかも震災小説として享受されるのも、

決して偶然ではなかったはずである。

震災前後半年という限られた領域ではあったが、網羅的な小説の読みを通して、〈音〉をめぐる生々しい現場が再現できたと考える。「汽車と云ふものは恰度蓄音機の針がレコードの上を這つて走るやうな音をさせて旅客の心に思ひくの歌を歌はせるものである」(宮地嘉六「素足で行く旅人」という輻輳化した比喩が成り立つ時代、怪談、ラヂオドラマ、映画脚本など音を欲望するメディアの台頭や誕生があり、文学がその外郭を広げていく時期にも重なる。テキストにおける可聴性と再現性へのアプローチは尽きない。

### 雑誌掲載の小説に見られる関東大震災前後の〈音〉調査表

凡例

- ・調査対象は、『新潮』『新小説』『中央公論』『女性』の4誌、1923(大正12)年3月から1924(大正13)年3月までに掲載された創作である。
- ・発表年月順、『新潮』『新小説』『中央公論』『女性』順、原則掲載順となっている。
- ・横に、雑誌名、年月、作品タイトル、作者名、〈音〉の項目及び備考欄を設けた。
- ・備考欄には、注意すべき音やその他キーワードなどを記載した。
- ・創作のうち、戯曲は「\*戯曲」とした。震災を扱った創作に対しては備考欄に「※」を付した。
- ・連載の場合( )に回数を記した。期間内に完結しなかったものも参考まで〈音〉項目を取った。
- ・『新潮』1923年9月号休刊、12月号新年特別号に合併、『新小説』1923年9-12月号休刊、『中央公論』1923年7月夏期増刊号あり。『女性』1923年12月号は休刊、翌1月号は特別号。
- ・〈音〉項目1-6に関して頻度の少→多を記号△○○により示した。数量化し得ないが重要度の高いものを黒マーク▲●で示した。

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2. 自然 音	3. 人工 機械音	4. オノマ トベ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『新潮』	1923・3	地主	藤森成吉			●				オペラと機械音、音の階級差
『新潮』	1923・3	祭の夜の出来事	加藤武雄			○				太鼓の音
『新潮』	1923・3	女と征服者*戯曲	田中純						△	どよめきの聲
『新小説』	1923・3	序曲	佐藤春夫			●	▲			電車が「メリメリ」「バリン、バリン」と音を立てながら崩壊する妄想
『新小説』	1923・3	旧恋(一)	近松秋江		△					川音「幽かにつぶやくような音」
『新小説』	1923・3	周の幽王*戯曲	近藤経一			○				効果音として音曲・木撃・子守唄
『新小説』	1923・3	蜥蜴の尾(三)	正木不如丘				○		○	石白「コロコロ」・水蒸気音「チブー」・子供達の戯れ歌(歌詞付)
『新小説』	1923・3	診察台余白	不如丘山人				○			腹鼓「ボンボコボン」・放屁「プーッ」・足音「パタパタ」
『新小説』	1923・3	青蛙先生(三)	不如丘山人							特になし
『中央公論』	1923・3	追憶の父	藤村千代		○	●	○	△		煙管の音
『中央公論』	1923・3	馬守眞	室生犀星		○	◎		○		粉雪・胡笛・静かさ
『中央公論』	1923・3	雨の八号室	新井紀一		●	○	◎	○		雨音・枯葉・軍隊の生活音・静かさ
『中央公論』	1923・3	雛	芥川龍之介						△	物音→目ざめ
『女性』	1923・3	遊女の天國	菊池寛		△					「しはぶき」
『女性』	1923・3	小さな犠牲*戯曲	三上於菟吉		●	○				水の音、ブランコ
『女性』	1923・3	Kと或田舎町	田山花袋		△					三味線
『新潮』	1923・4	母を思ふ日	吉田絃二郎		○	○	△	●	●	貧しさと静寂・行進曲



関東大震災前後の小説における〈音〉と知覚  
(大國・野本・乾・安藤)

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2. 自然の 音	3. 人工音 機械音	4. オノマ トベ	5. 静かき 無音	6. その他	7. 備考
『新潮』	1923・4	山犬と兎	相馬泰三						▲	物語末尾の女性の「悲鳴」
『新潮』	1923・4	庄吉と馬	伊藤蒔				△			オノマトベは特に物語に影響しない
『新潮』	1923・4	自潮	中戸川吉二					△		「静かな生活」を描く
『新小説』	1923・4	青蛙先生(四)	不如丘山人		▲		△			地下で冬眠中の蛙が、霜柱の崩れる「サラサラ」という音を聞く
『新小説』	1923・4	蜥蜴の尾(四)	正木不如丘		○	△		○		虫(「蟬・鈴虫」)の声・風琴の音・子供達の戯れ歌(二種)・虫売りの唄
『新小説』	1923・4	蒸気ポンプ	上司小剣			○	○			消防車の軋る「ブクブク」・警笛「ヒューウ」など
『新小説』	1923・4	病手	久米正雄			○	△		△	足音・機関車の「しふしふ」という音・銀骨の音
『新小説』	1923・4	盗賊と良心*戯曲	田中 元				△			効果音として足音・ドアを叩く音
『新小説』	1923・4	クリスマスとお正月	正宗白鳥						△	西洋人が「メリークリスマス」と叫ぶ声
『新小説』	1923・4	旧恋(二)	近松秋江							特になし
『中央公論』	1923・4	侘しすぎる	佐藤春夫			●			●	足音・こほろぎ・心内
『中央公論』	1923・4	生まざりしならば	正宗白鳥							特になし
『中央公論』	1923・4	楠正成*戯曲	武者小路実篤			○				梯が崩れ落ちる大きな音・笛
『中央公論』	1923・4	四人ぐらし	宇野浩二		△	○				鼯・電話・三味線
『中央公論』	1923・4	従妹	菊池寛				△			階段を上がる音
『中央公論』	1923・4	踏んだり蹴たり	長谷川如是閑				◎			笑い
『中央公論』	1923・4	おしの	芥川龍之介						△	エリ、エリ、ラマサバクタニかごとがましい声
『中央公論』	1923・4	澄子	野上弥生子				◎			咳・スリッパの音・猫
『女性』	1923・4	父の嫉妬	正宗白鳥				△			軒・煙管の雁首で火鉢の縁を叩く
『女性』	1923・4	喧嘩	水上瀧太郎				△			歌・棒で地上を打つ
『女性』	1923・4	追憶	葛西善藏				△			木魚
『女性』	1923・4	泣き笑ひ	園池公致		△	○				物音・蓄音器
『女性』	1923・4	お仙の縁談	神近市子				△			茶碗
『女性』	1923・4	堤*戯曲	田島淳		△	○				轡の音・犬の遠吠、三味線
『女性』	1923・4	柴式部の戀	上司小剣			●	▲			トントブン・水の音・戸を叩く音
『女性』	1923・4	藝者の母	永井荷風				▲	○		ガタガタ、コトコト・下駄の音
『新潮』	1923・5	二人兄弟	犬養健		●					兄との記憶を呼び覚ます犬の鳴き声
『新潮』	1923・5	青い絲	小川未明			●				鞭死を表象する「汽笛」
『新潮』	1923・5	肉親	正宗白鳥					△	▲	亡くなった妹の唸泣き
『新潮』	1923・5	弟子	久保田万次郎							特になし
『新潮』	1923・5	美人	佐藤春夫							特になし
『新小説』	1923・5	日輪	横光利一		◎	◎				動物の声・酒宴の音曲・生活音・戦争に関する音など
『新小説』	1923・5	蜥蜴の尾(四)	正木不如丘		○	△				鼠の足音・馬追虫の鳴声・雨音・歯を繰る糸車の音
『新小説』	1923・5	或日来た人達	菊池寛				△	△		符根を打つ「バチリ、バチリ」、窓を「バツリ」閉める、「ガラリ」と開ける
『新小説』	1923・5	青蛙先生(五)	不如丘山人							特になし
『中央公論』	1923・5	村の教師	小川未明		◎	○	△	○		汽車・小川・小鳥・「しん」
『中央公論』	1923・5	朝子 囁き(連載)	室生犀星						○	連載中 タイトル「囁き」・頭、心臓に響く音
『中央公論』	1923・5	お品とお鳥の立場	徳田秋声				△	◎		聲のトーン
『女性』	1923・5	或頃の私	加能作次郎				○	△		どきんどきん、ひたひた、つかつかなど
『新潮』	1923・6	熱海へ	牧野信一				△		▲	軍艦マーチ

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2 自然 音	3. 人工音 機械音	4 オノ マツベ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『新潮』	1923・6	神棚	豊島与志雄				△		▲	弁士の声、硬貨の落ちる音
『新潮』	1923・6	帽子の日記	小山内薫			△				ボギイ車
『新潮』	1923・6	籠の小鳥	徳田秋声			△			△	機械の響き、万歳の声
『新潮』	1923・6	六月の話	十一谷義三郎						△	高い叫び声
『新潮』	1923・6	美人	佐藤春夫							特になし
『新小説』	1923・6	蓄音機	丹野てい子			●	●			様々な生活音・女子大の鐘・唱歌・壊れた蓄音機の「かあがあ」「ぐうぐう」音
『新小説』	1923・6	老来	吉田絃二郎		△	△		△		波の音・汽笛・時計の音・墓場のような静けさ
『新小説』	1923・6	青蛙先生（六）	不如丘山人		△	△	△			蛙の声「ギャアギャア」・電車の音・バットで球を打つ音など
『新小説』	1923・6	水いらず	佐佐木茂索							特になし
『新小説』	1923・6	旧恋（三）	近松秋江							特になし
『中央公論』	1923・6	人間の意企	藤村千代			△	◎			下駄・ぼんぼん時計
『中央公論』	1923・6	投げ棄てられた指輪＊戯曲	金子洋文			○		●		管弦楽、「虹」唱歌、ターンターン
『中央公論』	1923・6	一夜の宿	佐藤春夫		○		◎			川のせせらぎの反復・説経
『中央公論』夏	1923・6	風に揉れる若木	小川未明				○		▲	人生や人間を刹那の刹那（色彩や音響や煩わしさ）から離れて考えられない
『中央公論』夏	1923・6	素足で行く旅人	宮地嘉六		△	△	○			汽車や私の心＝蓄音機の針の音やレコード
『中央公論』夏	1923・6	高さを競ふ＊戯曲	上司小剣				△			
『中央公論』夏	1923・6	悪日	新井紀一		●		○			風・馬・ガラス・鉄道
『中央公論』夏	1923・6	平凡人	正宗白鳥		○	◎	○			雨の音 琴の音 コロリンシャン
『中央公論』夏	1923・6	屍王皇子＊戯曲	永田衛吉							特になし
『女性』	1923・6	寝顔	永井荷風		△	△		△		雨だれ・軒を打つ音
『新潮』	1923・7	一夜	藤澤清造						●	病ゆえに音に敏感になる主人公
『新潮』	1923・7	半端物	加宮貴一			△	○		△	汽車、「ドつドつドつ」など
『新潮』	1923・7	二つの遺稿	加能作次郎				△			結核の咳、「コホン」
『新潮』	1923・7	珍客	宮地嘉六						△	下駄の音
『新潮』	1923・7	美人	佐藤春夫							特になし
『新小説』	1923・7	昔し住んだ家	近松秋江		△	○	△			猫の声・車の音・納豆売りの声・ガラスの割れる音「がらんがらん」
『新小説』	1923・7	南泉斬猫＊戯曲	岡本一平		○	△				猫の声・魚板の音（開幕・閉幕の合図）
『新小説』	1923・7	邂逅	水上瀧太郎			○				蓄音機から流れる義太夫、かっぱれ、カチューシャの唄・鴨緑江節・行進曲
『新小説』	1923・7	私の甥	長与善郎			△	△			汽車の窓の閉開音（ボタンボタン・ガタン）・汽笛
『新小説』	1923・7	青蛙先生（七）	不如丘山人			△	○		○	ピアノ・蛙の鳴き音・日和下駄の音・水音など・浅草の見世物の唄
『新小説』	1923・7	ある場面＊戯曲	下村千秋							特になし
『新小説』	1923・7	一情景	佐藤春夫							特になし
『中央公論』	1923・7	星を売る店 A merry tale	垣尾足徳	◎		●	●	△		蓄音機、ピアノ、手風琴、マンドリン、トリアドルツング、何とも云へぬメロディーなど
『中央公論』	1923・7	小母のいたづら	長与善郎				○		△	母の鳴咽、父の咳払い
『中央公論』	1923・7	心づくし	宇野浩二				○		○	兄の音声の狂い・アツカスチコン（耳の機械）の不快音
『女性』	1923・7	許嫁＊戯曲	小山内薫				△			がやがや
『女性』	1923・7	貴婦人	水守亀之助			△				電鈴
『女性』	1923・7	悪路	小川未明			△				足音
『新潮』	1923・8	マルクスの審判	横光利一			●	△			狂気へ誘う貨物列車の音
『新潮』	1923・8	明け方＊戯曲	水守亀之助		△	◎		●		狂人の叫ぶ声

関東大震災前後の小説における〈音〉と知覚  
(大國・野本・乾・安藤)

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2. 自然の 音	3. 人工音 機械音	4. オノマ トベ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『新潮』	1923・8	沼邊通信	瀧井孝作							特になし
『新潮』	1923・8	美人	佐藤春夫							特になし
『新小説』	1923・8	軽の太子	近藤栄一		○		△			鳥の声・波の音・虫「りんりん」
『新小説』	1923・8	白日夢	豊島与志雄			△			△	門の開く音・「頭痛の音」
『中央公論』	1923・8	押し花	室生犀星							蓄音機のカチミたい(比喩)
『中央公論』	1923・8	その頃のこと	宮島賢夫				○		△	失恋して「わっ」と叫びたくなる
『中央公論』	1923・8	勉吉の打算	徳田秋声			△	○			治療具ラヂオレヤの音
『女性』	1923・8	貞操*戯曲	菊池寛					◎		はゝゝゝゝ・ザブザブ
『女性』	1923・8	海彦山彦*戯曲	山本有三		△		△	◎		虫の音・トンチンテンチン・ばちんばちん
『中央公論』	1923・9	準造とその兄弟	野上弥生子			○	△	○		賑やかさ 囁き 比喩 通信文
『中央公論』	1923・9	変な男	豊島与志雄			△	◎	△		電車通り
『中央公論』	1923・9	韓信の死*戯曲	長与善郎							特になし
『中央公論』	1923・9	残された夫	正宗白鳥		△		◎	△		潮水・海底・海風・心臓
『中央公論』	1923・9	お紺の出京	藤村千代				○	△		比喩 ざわめき
『中央公論』	1923・9	盗み	菊池寛						△	深川音楽
『中央公論』	1923・9	私は生きて来た	近松秋江				△			風の音
『中央公論』	1923・9	春(連載・未完)	芥川龍之介					○	△	音の高いキス 沈黙
『女性』	1923・9	戀人	佐藤春夫							特になし
『女性』	1923・9	江戸名所圖會*喜劇脚本	岡本綺堂			◎				手をたたく
『女性』	1923・9	母と娘	里見淳		●	●	△			下駄を鳴らして・がんがん・機を織る・涙の音・ とんから
『新潮』	1923・10	一夜	田中純			○	◎			電話、自動車の音
『新潮』	1923・10	私とその家	稲垣足徳			△	△			蓄音機
『新潮』	1923・10	我がこと人のこと	室生犀星				△	△	○	英語/小鳥の囀り
『新潮』	1923・10	ひとり	森本嚴六				△	△	△	べちやくしや、おしやべり/女性
『中央公論』	1923・10	二人の独身者を繞る縁談	宮地嘉六		△	◎	◎		○	しんと更けていく夜・誰かの呼び聲・軍歌・安来 節など
『中央公論』	1923・10	土地繁栄	小川未明		○	○	△			汽車、自動車、流行歌
『中央公論』	1923・10	魔鳥	佐藤春夫		▲		△			※ シレク鳥の聲
『女性』	1923・10	お時宜	芥川龍之介				▲			トラタタ
『女性』	1923・10	或る病者の幻想	正宗白鳥							特になし
『女性』	1923・10	電車停留場	豊島与志雄			△	△	△		とんとんと踏み鳴らした・「無音の大きなざわめ き」
『女性』	1923・10	お澄の死*戯曲	吉井勇		◎	○	◎			風雨の音・笛切の音・浪の音・ビゼーのカルメ ン・爆竹・響岳
『女性』	1923・10	斯うして嬰兒が此の世に 生れた	高倉輝							特になし
『新潮』	1923・11	夜明前	岡田三郎			○			●	水に落ちる音=投身自殺
『新潮』	1923・11	発作	伊藤靖		○	○	◎	○	○	オノマトベは特に物語に影響しない
『新潮』	1923・11	私の弟と彼の友人	宇野浩二	△	△	△	○		△	Konaida wa ピアノ、蓄音機は音を発してはいない。
『新潮』	1923・11	鷹の辰公	正宗白鳥						○	※ 大震災・叫び声・物が壊れる音
『中央公論』	1923・11	朝子(連載)	室生犀星		○	○			○	※ 雨・蛙・電話・足音・靴音・飛行機・天変の ささやき
『中央公論』	1923・11	秋の曲*戯曲	武者小路実篤							特になし
『中央公論』	1923・11	薄墨色の憂愁	藤村千代			▲	○			キ、キ=薄ピンク色の洋傘が開く「おきよ、さん!」
『中央公論』	1923・11	ファイヤガン	徳田秋声	○			▲		○	※ 「だだだおしてゐる」爆弾・笑い

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2 自然 音	3. 人工音 機械音	4 オノマト ペ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『女性』	1923・11	鸚鵡	久米正雄		●		▲			波の音・雷音・べたべた・雨水の音・「く、く、く、く」
『女性』	1923・11	老婆の唄	加能作次郎				○			じゃあじゃあ・シシイ・ホイ、ホイ、ホイホイ…
『女性』	1923・11	母	廣津和郎			◎	△			草履・オルガン
『女性』	1923・11	港の人々	谷崎潤一郎							※ 特になし
『中央公論』	1923・12	頽廃時代を顧みて	近松秋江				△	○		傀儡師阿波の鳴戸を小唄とは音子が吟の風流や… 歌留多・冬の夜仕事の音・女の台詞を唇と胸に響いて聴く
『中央公論』	1923・12	あばばば一保吉の手帳の一部	芥川龍之介	△			△		●	※ 赤ん坊をあやす聲・ココアの銘柄・電話交換手
『中央公論』	1923・12	第一号監房にて	宮地嘉六				△	△	●	※ 地震後の大混乱＝自動車の轟・留置所の多声
『新潮』	1924・1	子に送る手紙	島崎藤村					●	○	※ 空壕の中で玄米をつく音・窒息者
『新潮』	1924・1	芋と指環	横光利一		○	○	◎	○	○	「音」という名・オノマトペの多用
『新潮』	1924・1	スプリングコート	牧野信一		○	○	◎	○	◎	※ 汽船の笛、クラリネットなど
『新潮』	1924・1	展幕	加宮貴一		○		○		△	ちやりちやり（身体感覚的な音?）
『新潮』	1924・1	一塊の土	芥川龍之介		○				△	牛の尻
『新潮』	1924・1	眞似＊戯曲	菊池寛		△					ウキウキ・豚の鳴き声
『新潮』	1924・1	父の夢	佐藤春夫			○			○	※ 時計の音・いびき
『新潮』	1924・1	香爐の煙	稲垣足穂					△	△	ハハハ（笑い声）
『新潮』	1924・1	卓法	里見淳						○	※ 震災後の群衆の声
『新潮』	1924・1	レオナルドの母	武者小路実篤							特になし
『新潮』	1924・1	枯野	久保田万太郎							※ 特になし
『新小説』	1924・1	家庭	室生犀星			●			△	足音（重要なモチーフ）・時計の音
『新小説』	1924・1	猶太人の宿	下田将美		○	◎	◎	○		倫敦の自然の音・生活音・バスの音「ガタガタ」・ 電話機「ガチガチ」など
『新小説』	1924・1	敵	横光利一		○	○				犬の生活音・汽車の音など
『新小説』	1924・1	古風な人情家	宇野浩二		△	△				波の音・足音
『新小説』	1924・1	子にかへる頃	小島政二郎		△	△				※ 蟋蟀の鳴声・物音・擬声語は少ないが擬態語は多め
『新小説』	1924・1	狐児物語	沢田撫松		○					虫（蟋蟀）の声
『新小説』	1924・1	清岡の行為	水守亀之助				△	△		雑誌を「くしゃくしゃ」めくる・「鉄鎖のがちゃがちゃ鳴る音」
『新小説』	1924・1	宮本武蔵（一）	本山荻舟				△			音（擬声語）というより擬態語が多い
『新小説』	1924・1	松平齋貴	伊原青々園				△			柔術の達人が年を破ろうとする場面で年が「メキメキ揺れ出す」
『新小説』	1924・1	木像	今東光				△			鞭を「びゅびゅ」と振り回す＊擬態語は多め
『新小説』	1924・1	頼光と酒顔童子	井上剣花坊				△			足音「ミシリミシリ」「バタバタ」
『新小説』	1924・1	宝永山の話	白井喬二						△	手品師の歌・大喝采
『新小説』	1924・1	作手伝五左衛門	長谷川伸						△	敵の名前が耳に響き渡る
『新小説』	1924・1	選挙立会人	佐佐木茂索							特になし
『中央公論』	1924・1	他人の災難	正宗白鳥				○		△	※ 鳥聲人語
『中央公論』	1924・1	或る男の手記	豊島與志雄		△		○		△	小鳥・「チイチイバツバ」遊び・笑
『中央公論』	1924・1	だるま＊戯曲	武者小路実篤					○		沈黙
『中央公論』	1924・1	キリストと祖父と母	野上弥生子							特になし
『中央公論』	1924・1	或る社会主義者	長与善郎			●				※ ピアノ・爆音
『中央公論』	1924・1	悲しきチャアリイ	宇野浩二			◎				懐かしい音・象徴の音
『中央公論』	1924・1	雨蛙	志賀直哉						▲	ガタンと音のするやうな感じ
『中央公論』	1924・1	震災余譚 戯曲一幕	菊池寛			△	○		○	※ 電車通りから二三町入った路地

関東大震災前後の小説における〈音〉と知覚  
(大國・野本・乾・安藤)

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2. 自然の 音	3. 人工音 機械音	4. オノマト ペ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『中央公論』	1924・1	顔	中条百合子			○	◎	○	△	イエスに似て生れたフランチ
『中央公論』	1924・1	退屈問答	佐藤春夫			△	○			言葉の虐殺
『中央公論』	1924・1	糸女覚え書	芥川龍之介						△	折りの言葉「のす、のす」
『中央公論』	1924・1	不安のなかに	徳田秋声			▲	◎	○	△	※ 尺八と琴・汽車・風
『女性』	1924・1	十日の菊	永井荷風							※ 特になし
『女性』	1924・1	世評＊戯曲	菊池寛			△				歌
『女性』	1924・1	贅沢	正宗白鳥							特になし
『女性』	1924・1	真昼の出来事	有島生馬			▲				水音
『女性』	1924・1	小春の狐	泉鏡花			△	▲		△	※ カーンカーン・唄・ちよろちよろ・水の音
『女性』	1924・1	乾いた唇	徳田秋声				△			蓄音器
『女性』	1924・1	道灌と缺血＊学校用歌劇	坪内逍遙				◎			『学校用歌劇』
『女性』	1924・1	結婚の問題	宇野浩二				△	△		昔に戻る「追羽根の音」・下駄の音
『女性』	1924・1	勝代の死	上司小剣				△	△		足音
『女性』	1924・1	本心	細田源吉					△		ベル
『女性』	1924・1	兄弟	長田幹彦				▲	△		川・轟々と・みんなん蟬・下駄の音
『新潮』	1924・2	造り花	室生犀星		△	●	○	●	●	都市と田舎の音の格差
『新潮』	1924・2	犬	前田河廣一郎				●	○		榴散弾などの音
『新潮』	1924・2	冬	諏訪三郎				◎	◎	◎	物売りの声など
『新潮』	1924・2	観漸	佐佐木茂索				○		○	夕刊売りの声・自動車の荷車の衝突
『新潮』	1924・2	素描	宮地嘉六							特になし
『新小説』	1924・2	痴情	尾崎士郎				●	△		音に敏感な男が主人公。周囲の生活音・足音・自動車・飛行機・時計の音他
『新小説』	1924・2	冬の旅	長与善郎			○		△	△	鶯の声・水の音・葉音「カサカサ」、日本人青年の喋る英語が耳障り
『新小説』	1924・2	夜もすがら検校	長谷川伸			△			△	油鯛の声・水音・「江戸弁の快い音声」、検校の謡
『新小説』	1924・2	生き残った男	平山蘆江			△		○	△	※ 波「ざぶん、」、風「どん」、亡霊達の声
『新小説』	1924・2	志士	佐々木味津三				△	△		柝(ひょうしぎ)の音・太刀の落下音「がちり」
『新小説』	1924・2	宮本武蔵(二)	本山萩舟				△			刃物を研ぐ音
『新小説』	1924・2	金将軍	芥川龍之介				△			鈴の音
『新小説』	1924・2	湯女挿話	白井喬二					△		「とんとんと云ふ梯子段の音」、竹竿の先で「パチャンパチャン」と叩く
『新小説』	1924・2	悪日	加宮貫一						△	※ 市電の車掌のアナウンス
『新小説』	1924・2	二十の女	近松秋江							特になし
『新小説』	1924・2	拷問の話	岡本綺堂							特になし
『新小説』	1924・2	断橋奇聞	田中貢太郎							特になし
『新小説』	1924・2	スーと消える女	沢田撫松							特になし
『新小説』	1924・2	騎射	今東光							特になし
『中央公論』	1924・2	影法師＊戯曲	正宗白鳥				△	◎		「空虚な音(オン)としてのトウキヤウ」
『中央公論』	1924・2	田舎暮し	室生犀星			◎	○	◎	○	※ オルガン・電話・渡り鳥の羽音・波の音
『中央公論』	1924・2	死者の満足	小川未明				△	○	△	町の物音=幸福・光の描写
『女性』	1924・2	腕角力	谷崎潤一郎						△	バタバタと足音
『女性』	1924・2	原始時代＊戯曲	中村吉蔵				△	△		ガヤガヤ・楽器・喊聲
『女性』	1924・2	繁野の敵討	加藤武雄							特になし

雑誌名	年月	作品名	作者名	1. ローマ 字表記	2 自然の 音	3. 人工音 機械音	4 オノマト ペ	5. 静かさ 無音	6. その他	7. 備考
『女性』	1924・2	喬生と金運	室生犀星			●				胡弓・箏竹
『新潮』	1924・3	迅雷	戸川貞雄		●		△			雷の音
『新潮』	1924・3	木枯の日	中河與一		△		△			凧
『新潮』	1924・3	お園の手紙	藤森成吉			○			○	※ トタンを打つ音
『新潮』	1924・3	鼻眼鏡	稲垣足穂			○			○	英語の唱歌・舞台のベル
『新潮』	1924・3	一九二〇年代＊戯曲	岡田三郎			○				ファシスタ示威行列の喇叭
『新潮』	1924・3	撮影	久米正雄				△	△		※ 震災を表象する音は特になし
『新小説』	1924・3	狼	金子洋文		●		●			嵐の海音「ど、ど、ど、どーっ」、吹雪の音・狼の吠える声・念仏・看経
『新小説』	1924・3	地獄絵巻	長谷川伸		△	△			△	山鳥の声・琴の音・村の流行唄
『新小説』	1924・3	篝火	川端康成		◎				○	雨音・秋の音・松明の音・鳥の声他「精神が壊れる音」「音のない」世界
『新小説』	1924・3	若者の夢＊戯曲	武者小路実篤			◎				鈴(開幕の合図)・戸を叩く音・車の音・讃美歌
『新小説』	1924・3	老教師	田中純				△	△	△	呼び鈴・梯子段を「みしりみしり」降りる
『新小説』	1924・3	宮本武蔵(三)	本山荻舟				△			「からりという音」「ばちんと刀を鞘にをさめる」
『新小説』	1924・3	三島怪樹記	沢田撫松				△			拍手「バチバチ」・地鳴り「ゴー」
『新小説』	1924・3	母を殺させた娘	宇佐川馨子					△		※ 「気味が悪いほどしんとしてゐる」
『新小説』	1924・3	焼跡	田山花袋							特になし
『新小説』	1924・3	贖物弁蔵	半井桃水							特になし
『新小説』	1924・3	毛刺	今東光							特になし
『新小説』	1924・3	志那小説	米田祐太郎							特になし
『中央公論』	1924・3	或る女の生活	藤村千代		●	●				音→風景・情景へ(3ヶ所)
『中央公論』	1924・3	花子の訪れ	宮地嘉六		△					※ 最後に時雨の音・鐘の音・物音
『中央公論』	1924・3	袈裟の魂＊戯曲	長田秀雄							特になし ト書に「笑い」「泣く」
『女性』	1924・3	香気な親子(対話)	菊池寛							特になし
『女性』	1924・3	窮鳥	加能作次郎					△		サクリ
『女性』	1924・3	林檎	豊島與与雄			●		○		列車の響き・びんびん

＊本研究は JSPS 科研費10435240の助成を受けたものです。